

●ポスターセッション (P-環境教育・国際協力-1~4)

P-環境教育・国際協力-1は、地域住民との協働による環境学習活動について、上賀茂地域と下鴨地域で取り組んだ内容についての報告であった。従来から取り組んでいる上賀茂地域は歴史ある地域で伝統行事・文化が引き継がれているが、逆に排他的な雰囲気が残っている。環境学習活動についても地元での推進母体がなく、人間関係が途絶えると活動も休止してしまう。一方、平成19年度から取り組んだ下鴨地域は、古くからの居住者が少ない新興住宅地であり、伝統行事や文化がない。しかしながら、環境学習活動には神社を中心に積極的な協力が得られ、地元の小・中学校にも20年度から協力が得られることとなった。このように、受け皿や地元の要望があるところでは活動しやすく成果もあがるが、地域を変えていくためには受け皿を作っても活動することが大切であることが指摘された。

P-環境教育・国際協力-2は、富士常葉大学で実施している水文と環境の講義・実習である「水辺ウォッチング」についての報告であった。調査対象は富士山の湧水で涵養される田宿川であるが、近くに製糸工場ができたために河川流量の減少と汚染が進んだ。これに対し住民が昭和60年から防災と環境保全活動を実施し、河川環境も回復している。水辺ウォッチングでは、2年生時に講義と実習で河川デビューを果たし、3年生時には月に1回の河川調査を行う。4年生時に卒論研究に取り組んだ学生は、調査の成果などを地元へ還元する。学生には、このような実践的な学習により水環境の保全に対する意識を向上させる手法が有効であることが指摘された。

P-環境教育・国際協力-3は、農業と環境との関わりに対する理解と関心を高めるために、県の農業試験場の職員が実施した小学生を対象の出張授業についての報告であった。授業は、水田が水中の硝酸イオンを浄化することを畑と比較しながら、簡易水分析キットを使って体験する内容であった。受講対象は愛知県内の住環境の違う小学校の5年生で、農業体験には差があったが受講後の反応は一致していた。水質分析体験では、9割が「おもしろかった」と感じ、6割が「他の水も調べてみたい」と関心が広がっていた。水田の多面的機能については、児童はもとより教師など指導者からも興味を持たれ、研究機関による教育活動の必要性が指摘された。

P-環境教育・国際協力-4は、2006年9月に北京で開かれた第5回IWA世界会議・展示会の報告であった。プログラムは、①上水処理、②下水処理、③水資源の統合と河川流域の管理、④上下水道システムの維持管理、⑤健康と環境、⑥適切かつ画期的な汚水システム、⑦市街化区域における戦略的な水管理、であった。中国の水資源存在量は世界の4分の1を占めるが、都市の80%が水不足で河川・湖沼の90%以上が汚染されている現状があり、今回の会議は水に注目させるには有意義な会議であった。

(愛知県農総試・環境基盤研究部 今井 克彦)